

英

国のマーガレット・サッチャー

1元首相が4月8日に87歳で亡くなった。その11年間の首相在任期間が英国のみならず世界にも与えた影響は、極めて大きい。賛否両論はあるが、20世紀の歴史に残る政治家であることは間違いない。

大量失業や激しい社会的対立を招いたなどの批判もある。だがサッチャー改革を当時の世界や英國の状況を十分理解しないで評価するのは不適切だろう。インフレと低成長に悩む英國経済を安定化させるために金融引き締めとその結果としての失業率の上昇は誰が首相でもいずれは避けられなかつた。

コンセンサス重視の政治手法が行き詰まつた状況で登場した英國初の女性首相は、石炭火力の供給源という独占的な地位を背景に、強い政治力を有していた炭鉱労働組合との対決も辞さなかつた。それが可能だったのも、閉塞感に倦む国民の支持を背景にしていたからだ。

英國社会で支配的だった経済衰退の悲観主義に同意せず、経済への行き過ぎた政府介入を是正し、企業と個人の自由を拡大することで経済は再生するという、當時ではまだ経済学界でも少数派の発想を現実に適用する政策イノベーションを推進した。そのイノベーションは成果を上げ、「大きな政府」一辺倒で来た戦後の政策の潮流を逆転させた。規制緩和や民営化は先進国・新興国を問わず、その後の経済活性化の世界的な標準的処方箋となつた。

筆者は1980年代半ばを、サッチャー改革真っただ中の英國で過ごしていたが、強い信念を持つた希有の指導者が国民を未踏の空間に導いていたが、いう時代感覚は忘れたい。筆者が留学していた大学で教鞭を執っていた教師のほとんどはサッチャー首相に対し批判的であり、テレビでは辛辣な風刺番組が繰り返し放送されていたのを見たが、選挙では勝利を重ねていた。IRAによるテロ行為では同僚政治家を失い、自らも危険にさらされたが、それにもひるまない並外れた勇気は、自分の知つてゐる政治家のイメージとはまったく別次元のものだった。

彼女が推し進めた民営化は、後戻りしない結果を残した。国有化企業は民間所有となり、その株式は民間

投資家や個人の手に渡つた。公営住宅は売却され私有財産となつた。新たに民間に戻つた企業は自由に事業機会を追求し、自分の住宅を所有する住民は多大な効用を享受している。政府保有に再度戻される見込みはまずない。また、電力や通信などのネットワーク産業の民営化は、産業再編にもつながつた。

つまり、サッチャー元首相の政策は、今日に至る英國の社会や経済の姿を本当に変えたのである。民営化といつても表面的な結果となる場合（道路公団など）や、民営化方針が途中で反転して結局実現されない場合（郵政など）がほとんどである日本とは、全然違う。日本人はいまだに本当のサッチャー的な改革を知らないでいる。賛美するにしても批判するにしても、論評者はそのことをまずわきまえるべきだと思う。

経済を見る眼

今週の眼

川本裕子

早稲田大学大学院フライナーズ研究科教授



かわもと・ゆうこ 東京大学文学部卒、英オックスフォード大学経済学修士。マッキンゼー勤務を経て、2004年から現職。トムソン・ロイター社トラスティ理事、2013年1月から日本取引所社外取締役。

撮影：吉野純治

サッチャー改革から学ぶ真の改革

は、今日に至る英國の社会や経済の姿を本当に変えたのである。民営化といつても表面的な結果となる場合（道路公団など）や、民営化方針が途中で反転して結局実現されない場合（郵政など）がほとんどである日本とは、全然違う。日本人はいまだに本当のサッチャー的な改革を知らないでいる。賛美するにしても批判するにしても、論評者はそのことをまずわきまえるべきだと思う。

IK